

動物學雜誌(第四十卷)第四百七十九號

昭和三年九月十五日

報 文

犬猫の寄生蟲に就いて

豊 田 一 長

大阪醫科大學病理學教室

目 次

- I 緒 言
- II 犬猫を終末宿主とせる寄生蟲に就いて
- III リグラ狀裂頭條蟲の分布に就いて
 - 1 リグラ狀裂頭條蟲の犬猫自然感染率と糞便検査蟲卵検出率との比較
 - 2 犬猫リグラ狀裂頭條蟲月別四季別自然寄生の状態
- IV 金線蛙及び鼯寄生のリグラ狀幼條蟲に就いて
 - 1 三重縣鈴鹿地方産金線蛙とリグラ狀幼條蟲
 - 2 阪神地方産金線蛙とリグラ狀幼條蟲
 - 3 大阪奈良京都地方産鼯とリグラ狀幼條蟲
- V 糞便内蟲卵検出と親蟲寄生との關係
- VI 犬猫に於ける各種寄生蟲の月別四季別自然寄生の状態
 - 1 犬十二指腸蟲
 - 2 猫蛔蟲
 - 3 猫肥頸條蟲
 - 4 猫肝臓デストマ
 - 5 瓜實條蟲
 - 6 犬鞭蟲
- VII 結 論
- VIII 主なる文獻

I 緒 言

本邦に於ける寄生蟲學の研究は最近二十年間に於いて長足の進歩を遂げ多數學者に由れる業績研究發表は只に人類におけるもののみならず、各種動物寄生蟲にまで攻究せらるゝに至れり。而して犬猫の如きは最も人類の生活と密接し、日常種々なる機會に於いて關係淺からざる此等の動物の研究は延ひて人體寄生蟲學上等閑に附すべからざるは余も亦深く信ずる所なり。偶、一昨年九月思をこ

ここに致し、リグラ状裂頭條蟲の人體寄生の甚だ多き京阪神地方に於いてその終末宿主なる多數の犬猫の内臓を検査して、以てその如何なる程度に於いて本條蟲の自然寄生率ありや、併せて人類生活と密接の關係ある犬猫とその寄生蟲とが如何なる關係のもとにあるやを研究するは甚だ興味ある事實なりと信ぜしを以て、本研究に着手し、爾來一年六ヶ月その間検査總數犬 311 頭、猫 513 頭、今その結果の大略をここに報告し、詳細なる表は追て報告することあるべし。

II 犬猫を終末宿主とせる寄生蟲に就いて

日常吾人の接近する種々の動物殊に犬猫等について、或種寄生蟲とその動物とが如何なる關係のもとに立つものなりやを研究するは人生實際上極めて重要な事項にして、且興味の深甚なるを覺ゆるものなり。

よし吾人の接近する種々なる動物の寄生蟲病に於いてそが本來の終末宿主又は中間宿主にあらずとするも、一時的即ち單に通過性の宿主として寄生蟲傳播撒布の一大役目を演じ、或は或種動物に於いては人類と全く同一にその寄生蟲の宿主として發育環上重大なる位置を有するものあり。之に於いてか既に安藤、淺井兩氏により、或は安藤、伊藤、今村三氏により、或は下村氏により、或は安藤、松原兩氏により、或は阪本、露木兩氏によりて何れも犬猫についてその糞便を検査し、幾種もの寄生蟲卵を見出し、犬猫に於いても亦寄生蟲發育環上大なる注目に値すべきことを論ぜられたり。余も亦次表に示せる如く犬 311 頭猫 513 頭の内臓を検査して犬に於いては検査總數 311 頭の中寄生蟲發見數 306 頭その寄生百分率 98.39%、猫に於いては検査數 513 頭その中寄生蟲發見數 493 頭その寄生百分率 96.10% なり。

剖檢上における犬猫寄生蟲寄生率と糞便検査蟲卵檢出率との比較

	検査總數	剖 檢 上 寄 生 數	同 百 分 率	糞 便 檢 査 蟲 卵 檢 出 數	同 百 分 率	百 分 率 ノ 差	剖 檢 上 寄 蟲 陰 性 數	同 百 分 率
犬	311	306	98.39	254	81.67	16.72	7	1.61
猫	513	493	96.10	352	68.61	27.49	20	4.90

之を一般各種寄生蟲について見れば犬に於いてはリグラ状裂頭條蟲 5.78%、犬蛔蟲 42.44%、犬十二指腸蟲 71.38%、肝臓デストマ 6.20%、鞭蟲 20.26%、瓜實條蟲 63.98%、ヘテロフィエス 8.36%、肺臓デストマ 1.61%、犬心臓フィラリヤ 2.89%。猫に於いてはリグラ状裂頭條蟲 12.48%、猫蛔蟲 81.28%、猫十二指腸蟲 11.53%、肥頸條蟲 57.89%、肝臓デストマ 14.81%、瓜實條蟲 41.32%、肺臓デストマ 1.15%。かくの如く何れも高度なる寄生率を示せり。

吾人と密接の關係ある犬猫に於いて、かくも高度の寄生率を示す寄生蟲感染の事實は吾人の寄生蟲豫防撲滅上甚だ寒心すべきことなり。こゝに實驗せる犬猫寄生蟲検査方法に就いては余は専ら市内の犬猫の屠殺を業とせるものより毎日新鮮なる内臓、消化管、肺、心、肝、腎、脾臓及泌尿、生殖器を持ち來らしめ、出来る限り諸内臓にわたり精細綿密に研索せり。且その直腸内容物検査に於いても出来る限りその蟲卵検出に於いて正確なる成績を期せんが爲めに之に使用せる器具は充分新鮮なる水にて數回洗淨し、矢尾板氏集卵法によりてその成績に萬遺憾なからしめんことを期せり。

III リグラ狀裂頭條蟲の分布に就いて

1 リグラ狀裂頭條蟲の犬猫自然感染率と糞便検査との比較

抑、犬猫にリグラ狀裂頭條蟲の成蟲が自然に密生せることを證せるに吉田先生、奥村、山田、武藤、三原、安藤、松原、阪本、露木、伊藤、今村の諸氏あり。余はこゝに大阪府下奈良縣下京都府下に於ける犬311頭を剖検してリグラ狀裂頭條蟲の寄生數18頭即5.78%に於いて該條蟲の寄生陽性なるをみとめたり。而るにその糞便検査に於いてはその蟲卵陽性數16頭にしてその百分率5.15%その前者との差0.64%を得たり。即蟲卵を検出し得ざりし2頭の犬に於いてはリグラ狀裂頭條蟲の未だ蟲卵を検出し得るに至らざる未成熟のものなり。而してこの2頭の中1頭は五月、他は六月に剖検せるものなり。尙成熟體と未熟體と混合して見出せしものは五月及六月に各一例あり。

依之觀之リグラ狀裂頭條蟲感染の機會は晩初夏の候に多きものならんと想像せらるべし。尙検査せし内臓の大きさによりて犬猫の生前の大きさをほぼ想像しそれに大中小の三型を分類せり。該條蟲検出十八例中十七例までは大型の犬に於いて見出され只一例のみ小型の犬に於いて見出されたり。

次に犬と同府同縣下に於ける猫513頭を検査せしにリグラ狀裂頭條蟲の自然寄生率は犬に於けるよりも甚だ多數にして検査總數513頭の中該條蟲寄生陽性數68頭、即13.25%なり、而るに糞便検査上に於いては53頭に於いてのみ該條蟲蟲卵を検出するを得たり。即ち蟲卵検出率は10.31%にして蟲體検出率と蟲卵検出率との差實に2.94%なり。その蟲體を見出すも未熟體にして蟲卵を検出し得ざりしものは四月五月各一例、六月七月各二例づゝ、八月一例、九月三例、十月五例、なりき。尙成熟體と未熟體との混合寄生を證せしもの十一月に一例ありき。依之觀之猫に於いても犬に於けると同様春夏の候に於いて該條蟲の感染機會の多きものなることを思はしむ。尙犬と同様猫に於いても大中小の三型に分類すれば、大型に於ける猫の検査に於いて五十二例、中型のものに於いて十一例、小型のものに於いて四例に該條蟲の寄生をみとめ、その大多數のものは大

型のものに寄生せり。尙猫に於いて犬に於けるより感染率の高き理由は猫は好んで蛙の如き第二中間宿主を生食するの習慣あるによるものなるべし。

尙該條蟲卵検出に於いては未熟體を宿せるもの以外は塗抹法及び矢尾板氏集卵法に於いて共に蟲卵検出陽性なる結果を見たり。

2 犬猫リグラ狀裂頭條蟲月別四季別自然寄生の状態

次表に於いて示せる如く犬及猫に於いて之を四季別に觀察すれば、晩春初夏の候に於いて高き寄生率を示し初秋より冬季に向つて低き寄生率を示せり。依之觀之春夏の候に於いては秋冬の候に比し種々なる様式に於いて感染の機會多きがためならんと思推せり。尙該條蟲消化管内寄生の場所は主として空腸上部に於いてその頭部の存在するをみとめ、蟲體後部は遠く廻腸中程の所にまでわたれるもの多數ありき。

剖檢上リグラ狀裂頭條蟲の月別寄生の状態(猫)

	一 月	二 月	三 月	四 月	五 月	六 月	七 月	八 月	九 月	十 月	十一 月	十二 月
檢 査 數	57	22	10	14	15	23	9	10	31	84	90	151
寄 生 數	2	3	1	2	3	3	2	3	7	17	14	11
寄 生 率	3.57	13.67	10.0	14.28	20.0	13.04	22.22	30.0	22.58	20.48	15.47	7.14

剖檢上リグラ狀裂頭條蟲の四季別寄生の状態(猫)

	春	夏	秋	冬
檢 査 數	43	42	208	233
寄 生 數	6	8	37	16
寄 生 率	13.96	19.04	17.76	7.29

剖檢上リグラ狀裂頭條蟲の月別寄生率(犬)

	九 月	十 月	十一 月	十二 月	一 月	二 月	三 月	四 月	五 月	六 月
檢 査 數	90	53	25	14	14	38	18	10	32	17
寄 生 數	5	1	2	1	0	3	1	1	2	3
寄 生 率	4.4	1.9	8.0	7.1	0	7.9	5.6	10.0	6.3	17.6

剖檢上リグラ狀裂頭條蟲四季別寄生の狀態(犬)

	春	夏	秋	冬
檢 査 數	60	17	168	66
寄 生 數	4	3	9	4
寄 生 率	6.66	17.64	5.36	6.06

IV 金線蛙及イタチ寄生のリグラ狀幼條蟲に就いて

1 三重縣鈴鹿地方産金線蛙とリグラ狀幼條蟲

蛙寄生のリグラ狀幼條蟲については既に多數の學者により多くの地方に於いて研究調査せられたり。而るに余の郷里なる三重縣下に於いては未だその研究發表あるを知らず。よつて昨夏いかなる程度の寄生率あるやを知らんと欲し、次表に示せる如く二町九ヶ村にわたり八月三日より九月三日まで一ヶ月を要して金線蛙捕獲數 932 匹、その剖檢に於いてリグラ狀幼裂頭條蟲寄生陽性なるもの 215 匹、即 23.47% に於いて寄生陽性なるを知りたり。蛙の大きさは金線蛙の中の大型と思ほしきもののみを捕獲して検査せり。

三重縣鈴鹿地方に於ける金線蛙寄生のリグラ條蟲の分布

捕 地	月 日	捕 數	寄 生 數	寄 生 率
國 府 村	3/VIII—9/VIII	232	52	22.41
井 田 川 村	10/VIII—13/VIII	149	36	24.22
石 薬 子 村	14/VIII—17/VIII	65	18	27.39
晝 生 村	18/VIII—22/VIII	105	25	23.80
龜 山 町	23/VIII—24/VIII	54	11	20.73
關 町	25/VIII	34	12	35.28
野 登 村	26/VIII	47	7	14.89
椿 村	27/VIII	41	8	19.51
久 間 田 村	28/VIII	123	25	20.32
川 崎 村	1/IX	45	12	26.66
庄 内 村	3/IX	37	9	24.32
計、平 均		932	215	23.47

要之余の郷里なる三重縣鈴鹿地方に於いてもリグラ狀幼裂頭條蟲の金線蛙に高度なる寄生率あることを窺知し得たりと云ひつべし。

2 阪神地方産金線蛙とリグラ狀幼條蟲

未だその調査を見ざる阪神地方産金線蛙寄生のリグラ狀幼條蟲の感染率がいかなる程度に存するやを検せんと欲し、次表に示せる如く阪神地方十五ヶ村に於いて大型金線蛙 895 匹を検してその中 162 匹即 18.85% に於いて寄生陽性なるをみとめたり。

阪神地方産金線蛙寄生のリグラ狀幼條蟲の分布

捕 地	月 日	捕 数	寄 生 数	寄 生 率
大 庄 村	13/VII — 25/VII	134	17	12.68
鳴 尾 村	18/VII — 19/VII	78	9	11.59
尼 崎	20/VII — 22/VII	57	6	10.53
芦 屋	23/VII — 27/VII	43	12	23.08
夙 川	2/VIII — 3/VIII	38	6	15.79
御 影	3/VIII	65	15	23.08
石 屋 川	29/VIII	35	10	28.57
大 石	29/VIII	41	17	41.46
西 宮	31/VIII	48	21	47.89
香 櫨 園	31/VIII	27	12	44.19
六 甲 村	1/IX	42	11	26.44
稗 島	2/IX — 5/IX	68	2	2.94
千 船	3/IX	35	0	0
十 三	26/IX — 27/IX	43	2	4.65
中 山 寺	7/IX	105	22	20.95
計、平 均		895	162	18.85

3 大阪奈良京都地方産鼯とリグラ狀幼條蟲

恩師吉田教授は多數のイタチについて一寄生蟲の研究をなされし折柄いかなる程度に於いてリグラ狀幼條蟲がイタチに寄生するやを検査すべく命ぜられたり。検査せしイタチは大阪奈良京都地方産のものなり。次表に示せる如く一昨年十二月より昨年三月まで、検査總數 61 頭、その寄生陽性數 61 頭、即 100% に於いて寄生陽性なることをみとめたり。寄生の場所はイタチも多く腋窩部、次で鼠蹊部なり。殊にその部の筋膜内に白き膜に包まれて存在せり。又吉田教授の指導によりて該幼蟲を小犬に試食して成書記載と同一なる多數のリグラ狀

裂頭條蟲の母蟲を得たり。又イタチ六十一例中剖檢の際に一例に於いて肺臓デストマの自然寄生を検出したる。

大阪奈良京都地方産イタチ寄生のリグラ狀幼條蟲の分布

月 日	捕 数	寄 生 数	寄 生 率
24/XII—27/XII	8(♂ 5 ♀ 3)	8	100.0
20/I —28/I	7(♂ 7)	7	100.0
1/I —	12(♂ 9 ♀ 3)	12	100.0
12/II —	9(♂ 8 ♀ 1)	9	100.0
13/II —	1(♂ 1)	1	100.0
16/II —	2(♂ 2)	2	100.0
20/II —	5(♂ 4 ♀ 1)	5	100.0
25/II —	4(♂ 3 ♀ 1)	4	100.0
27/II —	6(♂ 6)	6	100.0
7/III —	7(♂ 4 ♀ 3)	7	100.0
計、平 均	61(♂ 49 ♀ 12)	61	100.0

V 糞便内蟲卵檢出と親蟲寄生との關係

余は犬 311 頭及猫 513 頭の内臓を檢査してその体内寄生蟲親蟲存在と糞便内蟲卵檢出との間に次の事實あるを知りたり。

1) 糞便内に蟲卵檢出陰性にして而もその親蟲を検出せる場合。

次表に示せる如く糞便内に蟲卵檢出陰性にして而もその内臓に親蟲の寄生せるをみとめたる場合屢あり。

犬 311 頭剖檢における各種寄生蟲感染率とその直腸内容物檢査上における蟲卵檢出率との比較

	寄 生 数	寄 生 率	虫卵檢出数	虫 卵 檢 出 百 分 率	百分率兩者 ノ 差
リ グ ラ 條 虫	18	5.78	16	5.15	0.64
蛔 虫	132	42.44	71	22.19	20.25
十 二 指 腸 虫	222	71.38	163	53.69	17.69
鞭 虫	63	20.26	33	10.61	9.54
肝 臓 デ ス ト マ	19	6.11	15	4.82	1.29
瓜 實 條 虫	199	63.98	17	5.43	58.55
ヘ テ ロ フ ィ エ ス	26	8.36	16	5.14	3.22
肺 臓 デ ス ト マ	4	1.28	9	2.91	—
心 臓 ヒ ラ リ ヤ	9	2.89	—	—	—
邊 緣 條 虫	1	0.32	—	—	—
人 蛔 虫 卵	—	—	25	8.04	—

猫 513 頭剖検上における各種寄生蟲寄生率とその直腸内容物検査上
における蟲卵検出率との比較

	寄 生 数	寄 生 率	虫卵検出数	虫 卵 検 出 率 百 分 率	百分率兩者 ノ 差
リ グ ラ 條 虫	68	13.25	53	10.31	2.94
蛔 虫	417	81.28	275	46.20	35.08
十 二 指 腸 虫	13	2.53	10	1.94	0.58
肥 頸 條 虫	297	57.79	72	14.05	43.48
肝 デ ス ト マ	76	14.81	42	8.18	6.63
瓜 實 條 虫	212	41.32	17	3.31	38.01
鞭 虫	—	—	6	1.17	—
肺 デ ス ト マ	1	0.02	6	1.17	1.15
ヘ テ ロ フ ィ エ ス	3	0.58	—	—	—
ヒメ、ディミヌータ	—	—	4	0.78	—
ヘバ、ヘパチカ	—	—	2	0.39	—
ヒメ、ムリナ	1	0.02	1	0.02	—

此の際雌雄を検出し得たるものは雌蟲の未だ蟲卵を排出するに至らざる幼若のものなり。又雄蟲のみ存在する場合あり。此の種の検出は余の實驗に於いては蛔虫に最も多く十二指腸蟲之につげり。尙犬における瓜實條虫猫における肥頸條虫の如きは何れも高度の率に於いて寄生陽性なるをみとめたり。然れどもその糞便内に蟲卵を検出せし場合は親蟲寄生の率に比して遙かに少數なることは前表に示せる如し。即親蟲寄生率と蟲卵検出率との差は犬の瓜實條虫に於いては 53.55%、猫肥頸條虫に於いては 43.84%。その他同表に示せる如く犬に於いてリグラ狀裂頭條虫 0.64%、蛔虫 20.25%、十二指腸蟲 17.69%、鞭蟲 9.54%、肝臟デストマ 1.29%、ヘテロフィエス 3.22%。猫に於いてはリグラ狀裂頭條虫 2.94%、蛔虫 35.08%、十二指腸蟲 0.58%、肥頸條虫 43.48%、肝臟デストマ 6.63%、瓜實條虫 38.01% の差あることをみとめたり。

2) 糞便内に蟲卵の陽性なるに拘はらず母蟲を見出し得ざる場合。

a. 蟲卵のみ食物に混じて攝取せられたる場合。

猫に於いては四例に於いてヒメノレビス ディミヌータを二例に於いてヘパチコーラ ヘパチーカ及び犬に於いて人蛔蟲卵検出二十五例は明かに此の場合に屬すべきものなり。

b. 母蟲は何らかの原因によりて體外へ排出されたるに拘はらず尙糞便内に蟲卵を検出する場合。

先に小林、桑原、武藤氏等は犬の肝臓デストマ症に於いてその糞便内に蟲卵を検出するも遂に母蟲の寄生を證明し得ざる場合あるを記載されたり。余の實驗に於いては犬に於いて一例、猫に於いて三例その糞便内に蟲卵を検出し得るにも拘らず剖檢上終にその母蟲を見出さざりき。但しその肝臓に於いては母蟲の寄生せし痕跡歴然たるものあるをみとめたり。

c. 母蟲及び蟲卵を同時に見出すも而も本來の寄生生活に非ずして食物と共に攝取せられたる場合。

前表に示せる如く余の調査せる一頭の猫に於いて鼠を終末宿主とするヒメノレビス ディミヌータの既に死したる母蟲存し、その糞便内には多數の該蟲卵を見出せしが如きは即ち此の場合に屬するものなり。

以上記せるが如く體內寄生蟲存在と糞便内蟲卵檢出とを比較考察すればその判定愈々複雑にして「卵あるもの必ず親蟲あり」又「親蟲あるもの必ず卵あり」等の論法は事實信ずるに足らざるを深く感ぜしむ。依之觀之寄生蟲病の診斷は甚だ困難なりと云ふべきなり。

VI 犬猫に於ける各種寄生蟲の月別四季別自然寄生の状態

氣候風土及季節たるや一定の寄生蟲を生ずるに至大の關係を有するものにして、或は暖地に發生すれども極寒地に發生せざるものあり。或は春季に著しく流行して他の季節に於いては稀なるものあり。例へば蛔蟲は夏及び秋に、有鉤條蟲は夏期に、旋毛蟲は冬季に最も多し。此の幼蟲の移轉中間宿主の存在成長期の長短等によりて甚だ相違を來すものなり。蛔蟲の夏秋に於いて高度の寄生の認めらるるは蓋し春夏の期にその卵を生じ、これが食物と共に宿主體內に入る機會最も多く、従つて夏秋の季節に至り宿主體內に於いて母蟲となるが故ならん。

1 犬十二指腸蟲

次表に示せる如く犬の十二指腸蟲に於いては夏の候最も感染率大にして春秋の候ほど同等なり而して冬季に於いて最も低率なり。依之觀之犬の十二指腸蟲の夏期に於いて感染率最も高きは蓋し此の期に於いては經口的、經皮膚的の二様とも他の期に比し遙かに多く行はるゝものなるを思惟せり。尙該蟲寄生の場所は十二指腸及び空腸及廻腸全體にわたりて存在せるをみとめたり。

剖檢上十二指腸蟲の月別寄生の状態(犬)

	九月	十月	十一月	十二月	一月	二月	三月	四月	五月	六月
檢 査 數	90	53	25	14	14	38	18	10	32	17
寄 生 數	84	32	13	4	11	23	10	8	24	15
寄 生 率	93.3	60.3	12.0	28.5	78.5	60.5	55.5	80.0	75.0	88.2

剖検上十二指腸蟲の四季別寄生の状態(犬)

	春	夏	秋	冬
検査数	60	17	168	66
寄生数	4	3	9	4
寄生率	6.66	17.64	5.36	6.06

2 猫蛔蟲

次表に示せる如く猫蛔蟲の自然寄生は夏に最も多く秋は第二位なり。これ先述の如く春夏の候に於いて宿主體内に浸入感染するの機會最も多きが故なり。該蟲寄生の場所は胃、小腸、大腸に多く少數食道下部にも見出されたり。

剖検上猫蛔蟲の月別寄生の状態

	一 月	二 月	三 月	四 月	五 月	六 月	七 月	八 月	九 月	十 月	十一 月	十二 月
検査数	57	22	10	14	15	23	9	10	31	84	90	151
寄生数	34	16	8	11	12	18	8	10	25	70	73	119
寄生率	59.6	72.9	80.0	78.6	80.0	78.2	95.0	100.0	80.6	83.3	81.1	78.8

剖検上猫蛔蟲の四季別寄生の状態

	春	夏	秋	冬
検査数	39	53	205	230
寄生数	31	47	168	169
寄生率	79.53	91.06	81.63	70.36

3 猫肥頸條蟲

次表に示せる如く猫の肥頸條蟲は夏期に最も低く、冬季に最も高し。依之觀之猫は鼠を捕食すること秋冬の季に最も多く、春夏の候に少き事實あるならんと思はしむ。之をリグラ狀裂頸條蟲月別四季別寄生率の春夏の候最も高くして秋冬の候低きに比較すれば互に相反する事實を示せり。この一事よりしても猫は春夏に於いては容易に蛙其の他川魚等の生食物を捕食し得るによりて自然

鼠を捕食すること少く従つて肥頸條蟲の寄生率は夏少くリグラ狀裂頭條蟲の寄生率は夏に於いて高き理由の一部を説明し得るゝか、尙該條蟲寄生の場所は食道下部、胃、小腸、大腸にわたりてひろく見出されたり。

剖檢上肥頸條蟲の月別寄生率(猫)

	一 月	二 月	三 月	四 月	五 月	六 月	七 月	八 月	九 月	十 月	十一 月	十二 月
檢 査 數	57	22	10	14	15	23	9	10	31	84	90	151
寄 生 數	43	17	4	5	7	6	3	3	16	43	51	89
寄 生 率	75.4	77.2	40.0	35.7	46.6	26.0	33.3	30.0	51.6	51.1	51.6	58.9

剖檢上肥頸條蟲四季別寄生の状態(猫)

	春	夏	秋	冬
檢 査 數	39	42	205	230
寄 生 數	16	12	110	149
寄 生 率	40.78	29.76	53.15	70.57

4 猫肝臓チストマ

次表に示せるが如くその感染率は夏期に最も高くして冬季最も低率なり。依之觀之猫は春夏の候に於いては該蟲第二中間宿主たる淡水魚モロコ、フナ、ハヤ、ヒガイ、タナゴ、スナホリ等を捕獲攝取するの機會甚だ多きが故ならん。該蟲寄生の場所は肝臓、輸膽管、膽嚢及び十二指腸内なり。

剖檢上肝臓チストマの月別寄生状態(猫)

	一 月	二 月	三 月	四 月	五 月	六 月	七 月	八 月	九 月	十 月	十一 月	十二 月
檢 査 數	57	22	10	14	15	23	9	10	31	84	90	151
寄 生 數	6	2	1	2	3	4	2	2	5	13	13	16
寄 生 率	10.5	9.1	10.0	14.4	20.0	17.4	22.2	20.0	16.1	15.4	14.4	10.6

剖検上肝臓デストマの四季別寄生状態(猫)

	春	夏	秋	冬
検 査 数	39	42	205	230
寄 生 数	6	8	31	24
寄 生 率	14.81	19.87	15.34	12.06

5 瓜實條蟲

次表に示せる如く犬瓜實條蟲に於いてはその寄生率夏期に於いて高く冬及び春の期に於いて低し、而るに猫瓜實條蟲の四季別検査に於いてはその間何等の特別なるものを認めざりき。該蟲寄生の場所は空腸廻腸部にして大多數は廻腸部に多く見出されたり。

剖検上瓜實條蟲月別寄生の状態(猫)

	一 月	二 月	三 月	四 月	五 月	六 月	七 月	八 月	九 月	十 月	十一 月	十二 月
検 査 数	57	22	10	14	15	23	9	10	31	84	90	151
寄 生 数	20	9	4	9	6	9	3	2	13	33	42	55
寄 生 率	35.0	40.9	40.0	64.2	63.2	40.0	33.3	20.0	41.9	39.2	46.6	36.4

剖検上瓜實條蟲四季別寄生の状態(猫)

	春	夏	秋	冬
検 査 数	39	42	205	230
寄 生 数	19	14	88	84
寄 生 率	48.08	30.81	42.91	37.44

剖検上瓜實條蟲月別寄生の状態(犬)

	九 月	十 月	十一 月	十二 月	一 月	二 月	三 月	四 月	五 月	六 月
検 査 数	90	53	25	14	14	38	18	10	32	17
寄 生 数	15	46	18	8	7	20	9	4	13	9
寄 生 率	72.2	86.8	72.0	57.1	50.0	52.6	50.0	40.0	40.6	52.8

剖檢上に於ける瓜實條蟲四季別寄生の状態(犬)

	春	夏	秋	冬
檢 査 數	60	17	168	66
寄 生 數	26	9	129	35
寄 生 率	43.3	52.8	76.8	53.0

6 犬鞭蟲

先表剖檢上に於ける各種寄生蟲寄生率と糞便(直腸内容物)検査上との成績に示せるが如く剖檢數犬 311 頭中寄生陽性數 63 頭、即ち 20.26% なり。而してその寄生の場所は廻腸下部、廻盲腸部、蟲様突起内及大腸上部にして六十三例中悉くその蟲様突起内にその蟲體の寄生せるをみとめたり。依之觀之犬に於いては蟲様突起内は鞭蟲寄生の最も多き場所なり。蟲様突起炎は蓋し鞭蟲と至大の關係あるものに非るか。

VII 結 論

以上の實驗よりして左の結論を得たり。

- 1 大阪府奈良縣京都府下の犬 311 頭猫 513 頭を検査して犬猫を終末宿主とせる各種寄生蟲寄生率犬に於いては 98.39%、猫に於いては 96.10% なり。
- 2 以上の犬猫の検査にて各種寄生蟲寄生率及び糞便内蟲卵檢出率との間には先表剖檢上における各種寄生蟲寄生率と糞便検査上寄生率との比較に示すが如き結果を見たり。
- 3 リグラ狀裂頭條蟲における自然犬猫寄生率は犬に於いては 5.78%、猫に於いては 13.25% にして春夏の候高き寄生率を示し、冬季最も低き寄生率を示せり。
- 4 余の郷里三重縣鈴鹿郡地方産金線蛙 932 匹を検してその 23.47% に於いてリグラ狀幼條蟲の寄生をみとめたり。尙阪神地方産金線蛙 895 匹を検してその 18.85% に於いてリグラ狀幼裂頭條蟲の寄生せるをみとめたり。
- 5 大阪奈良京都地方産イタチ 61 頭を検してその 100% に於いてリグラ狀幼裂頭條蟲の寄生せるをみとめたり。尙その幼蟲を小犬に試食して成書記載に等しきリグラ狀裂頭條蟲母蟲多數を得たり。
- 6 イタチ六十一例の剖檢に於いてその一例に肺臓デストマ自然寄生をみとめたり。

- 7 犬の十二指腸蟲は夏期高度の寄生率を示し、冬季最も低き寄生率を示せるをみとめたり。
- 8 猫蛔蟲が夏期最も高き寄生率を示し、冬季最も低き寄生率あるをみとめたり。
- 9 猫肥頸條蟲が冬季最も高き寄生率を示し、夏季最も低き寄生率をみとめたり。尙肥頸條蟲寄生の場所は消化管(但口腔をのぞく)全體にわたりて廣く存在せり。
- 10 肝臓ダストマ感染率は夏期最も高く、冬季最も低き率にあるをみとめたり。而して該蟲寄生の場所は肝臓、輸膽管、膽囊、十二指腸、空腸上部にわたれるをみたり。
- 11 犬の瓜實條蟲寄生率は夏季最も高く、冬季最も低き寄生率なるをみとめたり。尙猫瓜實條蟲に於いては四季別に於いて特別の變化を見ず。
- 12 犬鞭蟲はその寄生陽性數六十三例、即ち 20.26% にして六十三例中悉く蟲様突起内に於いて該蟲寄生をみとめたり。依之觀之鞭蟲は蟲様突起炎の原因に一定の關係あるものに非るか。
- 13 以上の實驗によりて「卵あるもの必ず親蟲あり」又「親蟲あるもの必ず卵あり」との論法の必ずしも眞ならざることの事實を明かに證し得たりと云ひつべし。
- 14 以上の諸點よりして家畜殊に犬猫の寄生蟲に關係する研究は極めて重要にして徒に等閑に附すべからざる問題なりと信ず。

擱筆するにあたり本研究を命ぜられ懇篤なる指導及び本稿校閲の勞を賜りたる恩師吉田教授に深厚なる感謝の意を表す。

VIII 主 なる 文 献

- 1 安藤亮・伊藤斯郎——リグラ狀裂頭條蟲の研究補遺。醫事新誌 No. 1083, 1086.
- 2 安藤亮・伊藤斯郎——人體寄生のリグラ狀裂頭條蟲の三例。日本皮膚科雑誌 Vol. XXI No. 5.
- 3 安藤亮・下村四郎——リグラ狀裂頭條蟲の研究補遺。皮膚科記要 Vol. I No. 3.
- 4 安藤亮・松原謹——岐阜縣惠那郡落合村猫寄生のリグラ狀裂頭條蟲に就いて。皮膚科記要 Vol. II No. 1.
- 5 安藤亮・露木寛——鼠類を終末宿主とせる腸内寄生吸蟲の研究。東京醫事新誌 No. 2340.
- 6 今村啓太郎——リグラ狀裂頭條蟲のデモンストラチオン。京都醫學會雑誌 Vol. VI No. 2.
- 7 武藤昌知・三原吉裕——リグラ狀裂頭條蟲の母蟲の由來。東京醫事新誌 No. 2220.
- 8 武藤昌知——肝臓ダストマ流行地域における犬猫糞便検査成績及び本吸蟲と鼠との關係に就いて。東京醫事新誌 No. 2188.
- 9 武藤昌知——糞便内蟲卵検出と親蟲寄生との關係。治療及び處方 No. 42.
- 10 武藤昌知・三原吉裕——岡山縣都窪郡田村人家飼育の猫に寄生する一種條蟲の由來に就いて。京都醫學會雑誌 Vol. XVII No. 11.

- 11 武藤昌知・赤松信彥——リグラ狀裂頭條蟲(第一回報知)。京都醫學會雜誌 Vol. XIV.
- 12 勝沼精造——腸内寄生蟲と糞便検査蟲卵検出。東京醫事新誌 No. 2260.
- 13 奥村多忠——リグラ裂頭條蟲の發育環について。東京醫事新法 No. 2220.
- 14 坂本修・露木寛——名古屋地方犬猫寄生のリグラ狀裂頭條蟲の成蟲について。皮膚科記要 Vol. II No. 20.
- 15 山田司郎——蛙におけるリグラ狀裂頭條蟲に就いて。大阪醫學會雜誌 Vol. XX No. 7.
- 16 山田司郎——リグラ狀裂頭條蟲の發育環について。日本醫學 Vol. IX No. 7.
- 17 吉田貞雄——猫のリグラ狀裂頭條蟲。動物學雜誌 Vol. XXVIII No. 327.

(昭和三年二月拾日)

本邦産數種の未記録種並びに新種の甲蟲

(和昭三年六月拾一日受領)

土 井 久 作

本編には本邦より未記録の甲蟲四種及び一新種を記載す。此等の五種は步行蟲科 Carabidae, 葉蟲科 Chrysomelidae, 及び瓢蟲科 Coccinellidae, の三科に屬するものにして、廣く千島、樺太、朝鮮、臺灣に産するものなり。

此等五種の中三種は恩師松村先生、一色、高野兩農學士、高木五六氏、伊藤茂治氏並に E. GALLOIS 氏の採品にして、二種は著者自身の採集にかゝるものなり。

本文を記するに先だち日頃指導に預づかる恩師理、農學博士松村松年先生に衷心の謝意を表すると共に、標本を採集されたる前記の諸氏に對し永く其の恩恵を歌はんとす。尙ほ友人關口俊雄氏は繪畫に助力を與へられたれば同様深謝を捧ぐ。

步行蟲科 Carabidae

Nebria nitidula FABRICIUS チシマルリゴミ(新稱)

FABRICIUS, Spec. Ins. 1, p. 184 (1781); HEYDEN, Cat. Col. Sib. p. 14 (1880-81); JACOBSON, Käf. Russl. p. 260, t. 1, f. 24 (1910).

記載 頭部、前胸、翅鞘の縫合線の兩側は光澤ある暗紫色、翅鞘の兩側は光澤ある綠色、觸角、肢及び體の裏面は黑色なり。體長 10—11.5 耗。

頭部 顔面の兩側に近く、各一個の凹所を有す。上唇は黑色。大腮は黒褐色。觸角は體の半ばに達し、基部の四節は光澤ある黑色、他節は光澤を缺き黄色短毛を密生す。第二節は最短にして、第五節は最長なり。眼は黑色、大形にして隆起す。